



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.157

2016.10.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

51

# 「県史県外調査 施設・人・遺跡・遺物との出会い一覽

県史の編纂委員になって一番得をしたなと思うのが県外調査でした。

1983・7 岐阜・愛知へ弥生土器の調査。市沢英利君と。美濃加茂市中央公民館 各務原市渡辺博人さん為岡・今遺跡の方形周溝墓の欠山期と元屋敷期の違い・土器は高杯・壺での違いを。富加町役場 東山浦遺跡の土器 半布里遺跡からは開元通宝が住居址床から出土という。古代の戸籍資料から注目され研究者が訪れるという。関市文化会館 吉田英敏さん重竹・南青柳遺跡弥生中期土器・磨製石鏃未成品、整理中の奈良・平安・中世の遺物を。岐阜県立博物館 徳松さん 一本松・杉ヶ洞・江東遺跡の土器 半布里遺跡土器のコピーを貰う。一宮市 岩野見司・服部さん 縄文晩期から弥生中期から後期の多くの土器 弥勒・元屋敷・山中・蕪池遺跡。土器の大きさと胎土の違いに驚く。貝殻山資料館 高橋信明 丹羽博さん 弥生中期・後期土器。愛知県甚目寺資料館 石黒立人 赤羽次郎さん 甚目寺遺跡現場と出土遺物阿弥陀寺・勝川・土田遺跡土器。南山大学人類学博物館 都築みどりさん 西志賀・高倉・瑞穂・神明・二つ塚遺跡 日本考古学研究所からの移管資料。名古屋大学 渡辺誠さん いろいろ話す 南博史 齊藤孝正さんに会う。紅村弘さん宅に久しぶりに話す。見晴台考古資料館 岡本さん 見晴台・旧柴川遺跡土器。豊田市郷土資料館 曾根・霊岩寺・高橋遺跡土器・毛呂遺跡の銅鐸。帰りに愛知県陶磁器資料館・瀬戸市歴史民俗資料館・土岐市美濃陶磁歴史館で陶磁器見学。



1983・9 北陸三県へ縄文・弥生土器を。会田進・小林康男君と富山県埋文センター 所蔵遺物見学 西野秀和さんの案内、七尾市国分尼塚前方後円墳発掘現

場見学 細口源田山・国分高井山遺跡弥生土器 真脇遺跡遺物整理室 加藤三千雄さん 縄文前期遺物を 小島俊彰さんがオートバイで来る。津幡町刈安野々宮遺跡現場見学。石川県埋文センター 橋本澄夫・三浦・八千代さん 次場・戸水・徳前遺跡土器。金沢市遺物整理室 南久和さん 新保チカモリ遺跡遺物。御経塚史跡公園 野々宮町御経塚遺跡文化財収蔵庫の保管縄文後期遺物。一乗谷遺跡 一乗谷朝倉氏遺跡資料館 小野正敏さん。福井県埋文センター 糞置荘遺跡遺物。吉こ遺跡現場 方形周溝墓群と出土遺物。若狭資料館 森川昌和さん 鳥浜貝塚遺物。

1985・2 南関東の弥生土器を。笹沢浩君と。厚木市役所 登堂古墳埴輪。厚木市郷土資料館 井上洋一さん 子の神遺跡。海老名市本郷遺跡。市道発掘資料整理室。横浜市埋蔵文化財調査委員会。奈良地区遺跡調査団。日本窯業研究所横浜分室。夜 浜京で神奈川の弥生研究者と朝光寺原式土器を話す。

1988・8 東海の早期土器を。宮下健司君と。足助町資料館 鈴木茂夫さん 馬場・山の神・大屋敷・今朝平・日陰田・寺の下・沢尻・北垣外・大麦田・則定本郷遺跡。岡崎市郷土館 荒井信貴さん 真宮・矢作川河床・神明・高木遺跡・岩津1・2号古墳出土遺物。豊川市郷土資料館 前田清彦さん 麻生田遺跡。豊橋市美術博物館 贄元洋さん 大木・瓜郷・寄道・欠山・大西貝塚。菊川町埋文資料室 水島和弘さん 三沢西原・白岩遺跡。袋井市教育委員会 永井義博・寺田義昭・吉岡伸夫さん 長者平・山下・鶴松・大畑貝塚・愛野向山・大門・坂尻遺跡。磐田市埋文センター 中島・安藤さん 馬坂・西貝塚・新豊院山・見性寺貝塚・一宮・広野・玉越遺跡。浜松市立博物館 向坂鋼二・佐藤由紀男さん 蛭塚遺跡。富士宮市郷土資料館 馬飼野さん 若宮遺跡・黒田向林・渋沢遺跡。山梨県埋文センター 末木健・森和敏・田代孝さん。山梨県立博物館。山梨文化財研究所 萩原三雄さん。多くの研究者・地域の遺跡と遺物との出会いが私の大きな財産になった。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

### 目次

■田舎考古学人回想誌 県史県外調査 施設・人・遺跡・遺物との出会い一覽 神村 透 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第150回) 比毛君男 …3
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第14回) 岡田淳子 …2	■考古学者の書棚 「貝塚の考古学」 千葉 毅 …4

## 考古学の履歴書

## 過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第14回) 岡田 淳子

## ⑭ツンドラの遺跡調査へ

1972年6月はじめ、子どもたちの学校が夏休みになるのを待って、私たちは初めての「海外発掘調査」のため、オハイオからアラスカへ向かった。当時の調査費は限られていたので、テントや寝袋、食器に至るまで、すべて個人持ちの物を利用することになり、荷物は驚くほど多くなった。これを機会に紙1枚でも減らすことを試み、登山家に学ぶことになる。実際に行き先は人の住まないツンドラの只中で山と同じ、歩けば1週間はかかる缶詰工場とアリユートの小さな村が人の住む最も近いところであった。

8月の初め、ビル・ワークマン(留学時の友人)が住むアンカレッジの家の庭で、日本から来た後輩たちと合流した。キャンプ生活の基本になるテントを立てて確かめ、生活や調査の道具を小まめに点検する。足りないもののリストを作り、翌日は我が家の古い車が活躍した。ほとんどをアンカレッジで調達、生ものは缶詰工場の売店を利用することにした。

行き先は、リープ・アリユーション航空が一回だけ飛んでいるアラスカ半島のポート・モラー空港。朝から待って昼近くに離陸した機材には日本の文字が書かれていて、日本で役目を終えたYS11機だったのには、全員驚きと懐かしさを覚えた。滑走路にコンテナとドラム缶だけの飛行場に降り立ち、迎えてくれた缶詰工場の古いトラックに乗る。

遺跡付近は、気象の厳しいところで、晴天は月に3、4日しかない。もちろん飛行機がスケジュール通りに着くことも少ない。私たちの一行がポート・モラーに降り立った日は、その数少ない晴天の日だったが、夕刻から風が出て雲行きが怪しくなった。大型船のアイゼンバックをチャーターし、工場長の息子さんが漁船で遺跡のある岬まで送ってくれたのだが、漁船は私たちを舳に載せると、さっと帰って行った。一便目は上陸できたが、二便目は転覆、三便目は遂に出せず、本船の碇はもぎ取られて、大時化の中に残された。

この付近で天候の急変がしばしば起こることは、滞在中に身に沁みて知らされた。10人30日分の米は水浸し、砂糖も塩水に浸かる。初日に見舞われた稔であった。

モラー湾入り口の対岸、遠浅の岬にあるホット・スプリング遺跡は、1928年にニューヨーク自然史博物館のE・M・Weyerlによって発掘された(Stoll McCracken Arctic Expedition)。この時は船で寝泊まりし一カ月かけて調査している。この調査は遺跡全体を探るもので、1972年に私たちが、発掘地点や方法を決めるのに大変役立った。どの地点に古い層があるか、どんな貝層からどんな遺物が見込まれるかを知ることができたからである。

1960年、明治大学が創立80周年記念事業の一環として、



▲Port Moller ホットスプリング遺跡 航空写真

米国ウィスコンシン大学と共同で当遺跡の発掘調査をしたことがある。考古学班は杉原荘介先生が指揮をされ、岬の台上から下に向けて長いトレンチを一本掘った。日本を出発される前、杉原先生は「アラスカで一番古いものを掘って来るぞ」と言われていたが、トレンチの底から14Cで3,500BPを超える古い年代が得られた。手伝ったのは若き日の戸沢充則さんと岡田宏明で、戸沢さんはその時の発掘の様子を簡潔な文章で我々の出版物に寄せてくださったし、岡田はアリユート・エスキモー文化圏の境界に興味を持っていた。

1972年の予定は、遺跡の全体を掘むための測量と、取り敢えず1箇所堅穴を掘ってみることだった。1960年の地形測量図に、貝層の分布域と地表面から見える窪みの跡を載せる仕事は、ツンドラの凸凹に足を取られながら、労力のいる作業だった。表面の窪みは250個数えられ、多くが住居跡らしく思われた。

そのうちの1カ所を低い所(Lowland)で掘ることにしたが、更に労力を要したのは表土剥ぎで、表土に食い込んでいるツンドラの芝根を取り除く作業であった。スコップを立てて鉄匙の部分に力をかけて両足で跳び降りる。「アラスカ跳び」という単語が生まれ、私にはとうてい不可能な作業だった。私の体重では根を切断できない。

それでも住居は完掘できた。北方の家らしく床には高低があり、柱穴や壁上の棚、粘土を張った椀状の設備(粘土容器)など、遺跡初の住居調査になった。この年は貝層の無い高い部分(Highland)でもう一カ所住居を掘って終了した。

遺跡でのキャンプ生活は、足りない物だらけだが楽しいものだった。水は二人一組で、約2キロ先の小さな流れまで汲みに行く。天秤棒で担いで戻るが、1日に1回は必要な作業であった。高台と低地の間の低いところに温泉が湧き出ている。遺跡の名前、ホット・スプリングの由来であるが、源泉は75~80℃、その湯を流路に流して冷まし、小屋近くの窪み(堅穴住居の跡?)に流し込む。底には一部スレートを敷いてある。気温10℃前後の中で、この温泉プールは私たちのキャンプを潤し、大きな助けになった。調査の代表者は、「それぞれが、石器時代の心を味わった」と書き残している。

低段丘の縁に、私たちが許可を得て利用していた古い小屋がある。これはシアトル在住の資産家 Frank Cowden が考古学好きの奥さんのために建てたものであった。研究者ではないので記録は残っていないが、夏期は幾年もこの小屋に泊まって貝塚の発掘を行ったという。掘りだした遺物は、現在アンカレッジの州立博物館に保管されている。

## 略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。



## Uレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 150

#### 上高津貝塚 ～茨城県土浦市～

比毛 君男

上高津貝塚は、茨城県南部のほぼ中央に位置する土浦市に所在する国指定史跡である。茨城県の東部から南部にかけて、国内第2位の面積の湖霞ヶ浦が広がり、南西側の入り江である土浦入りを望む位置にある。市の中心市街地のほぼ中央を桜川が東西に流れ、霞ヶ浦に注いでいる。

先史から中世にかけての霞ヶ浦は太平洋に続く海の一部であった。縄文時代における上高津貝塚周辺は、遠浅の内湾に河川が注ぐ立地であるため、海水・汽水・淡水の漁労活動に適した地域であったといえよう。

所謂周知の遺跡の中で、貝塚に種類を限れば市内で20箇所、霞ヶ浦周辺では185箇所程存在している。千葉県に次いで貝塚の多い茨城県において、上高津貝塚が国文化財の指定を受けた理由は、大きく二つある。一つは遺跡が大規模であり遺存状態が良かったこと、そしてもう一つは過去からの調査等の蓄積があり、この地域の特徴を反映する遺跡であることである。前者は、一つの台地全体が遺跡となっており、面積は約44,000㎡を測る。学術調査の結果、古墳後期から奈良時代の建物が一部重複するが、それ以外は縄文時代の遺構に限られている。近世の絵図面でも周辺は畑や山林で占められ、近代以後も大規模な開発が及ばなかった。

後者については、戦前には大衆小説家江見水陰による発掘、大山史前学研究所による調査が、戦後には慶應義塾高校、慶應義塾大学、東京大学等による発掘調査が行われた。これらの調査で上高津貝塚は縄文時代後晩期を中心とし、台地斜面にAからEの5地点にわたる環状貝塚であることが理解された。更に無文粗製の土器の存在から、当時霞ヶ浦沿岸で発見例が増加した製塩に関する遺跡であることも推定されるに到った。

国からの文化財指定後に土浦市は指定範囲の土地買収を始め、当時文化庁が進めていたふるさと歴史の広場事業の適用を受けたことから、史跡整備とガイダンス施設をセットで現地に建設する計画を進めた。更に市独自で予算をかけ、埋蔵文化財センターと考古資料の博物館的機能を付与し、平成7年10月に「上高津貝塚ふるさと歴史の広場」としてオープンした。現在当館では、特別展や収蔵品展等毎年3度の展示と各種体験講座を実施するほか、市内の埋蔵文化財の調査、資料保存活動を行っている。

史跡整備に伴う学術調査は、平成2～3年に実施されている。平成2年冬から翌年春に竪穴建物等集落の情報を得るためにC地点、平成3年夏に貝層からの情報を得るためにA地点、同じく集落の情報を得るためにE地点を調査し、慶應義塾大学や筑波大学等の協力で重要な成果を得られた。特にA地点調査ではコラムサンプリングを行い、細分された層位毎に動物遺存体等の微細資料を抽出することができた。またE地点では屋外炉が見つかり、既出の製塩土器と共に霞ヶ浦南岸の製塩を反映する事例として一石を投じることとなった。

筆者は幸運にして平成2～3年の学術調査に参加することができた。自分の専攻する中世遺跡は行政調査等に参加することで遺物や遺構を調査する経験を求めてきた。しかし時代や方法が全く異なる学術調査では、明確で具体化した目的を有する調査方法や、研究課題に立脚した資料収集の方法等を知ることができ、学問としての考古学の奥行きを感じさせてくれた。

また、縁あって開館の年に市学芸員となり、20年以上市内の埋蔵文化財保護事業と、展示や教育普及等の博物館事業に携わることができた。この間、景気や業種等経済産業の変動、官から民への構造改革、標準化・可視化等文化財保護行政の変革、評価主義等地方自治行政の変化等を経て、文化財行政もまさに曲がり角に差し掛かっているように思えてならない。当館のような一地方自治体の博物館も、その存在は決して安定したものでは無くなった。積極的に活動を外部に見せてゆかなければ、存在価値を矮小化させられ、消滅する位の危機感が必要となった。埋蔵文化財専門職員とはいえ法律的に何等その身分は保障されていない。そのためには何をすべきだろうか。

筆者は、調査とその成果の市民への公開こそが最も大切なことだと思う。新たな発掘調査に限らずとも、既存資料の再評価や考古資料以外の文化財にもアンテナを張り、常に情報発信をしてゆく。発掘調査は本質的に市民への還元が必須だが、自分たちの存在意義を確認し主張する上でも歴史や文化財全般への調査研究が重要であると考え。地域には今まで光の当てられていなかった歴史が埋もれており、これらを調査で明らかにし、成果を市民に分かりやすく伝えることこそが地域の博物館のもつ醍醐味である。

そのためには広く浅くとも知識を広げ、常に様々な情報に耳を傾け、鋭い武器として研究を続けてゆくことが求められよう。異動の少ない専門職員として雇われた事の見返りは、自分のスキルを磨き精進し続けることこそが地方自治体の己の位置を確かなものにしてゆくのだと信じたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは馬場信子さんです。



▲上高津貝塚復元住居 (C地点)



▲貝層断面展示施設 (A地点)

## 考古学者の書棚

## 「貝塚の考古学」

鈴木公雄 著／東京大学出版会(1989)

千葉 毅

先日、千葉市に六通貝塚を訪ねた。ハマグリやキサゴ、ツメタガイなどの貝殻が畑一面に散布している様は、あたかも季節はずれの雪が積もったかのようにであった。

予習をほとんどしないまま現地に立った私は「厚く堆積した貝層を前にいくら考えていても、よくもまあこんなに貝を食べたものだ、という感想がわくくらいで、そこからすぐに何か有効な情報や知識が得られるとはかぎらない」という『貝塚の考古学』での鈴木公雄の記述を思い出していた。

本書は、1970～1980年代に著者が手がけた貝塚研究の成果をまとめたもので、I 貝塚と考古学研究、II 貝塚を量る、III 貝殻のメッセージ、IV 魚骨は語る、V 文化遺産としての貝塚、といった5章構成になっている。

本書では、モースによる大森貝塚発掘以来の貝塚調査研究史が簡潔に整理されつつ、そこから派生する課題、あるいは貝塚調査における方法論やサンプリング、さらには日米の貝塚の現状を比較しながら貝塚を保存する意義などにも議論は波及していく。もちろん、どの章も魅力的な内容を含むが、私は貝塚の総量を数値化し、評価するための方法論が実践的に示された「II 貝塚を量る」が好きだ。

著者は1978年から1981年に東京都伊皿子貝塚の調査を実施した。この調査では、貝塚に残された貝が先史時代の食料源としてどのように評価できるのかを確かめることが一つの目的とされた。食料として評価するためには「出土した大量の貝殻」の状態から様々な変換を行ない、有用な情報を引き出さなくてはならない。本章ではこの過程での方法や考え方が丁寧に解説されている。

まず、貝塚の体積を求める方法が検討される。著者は「コンター法」「角柱法」「平均厚さ法」という3つの方法を提示した上で、それぞれの方法で求積を行なった。複数の方法を実施したのは「それぞれの方法に長所と短所があること、それぞれによって得られた結果はどのくらい異なるのかを比較することから、最も経済的で精度の良い求積方法は何かを明らかにする」ためであるという。調査方法の実践的模索、それを読者と共有しようとする配慮は著者ならではの、と思う。この結果、最も精度が良いのは「コンター法」であるという結果が得られた。さらに他の方法においても大きな誤差なく求積が可能であることが示され、今後の貝塚調査に際しても、調査の進行や経済的な面を考慮しながらこれらの方法を応用していくことが推奨されている。これにより、伊皿子貝塚の体積は290.3m<sup>3</sup>という数値が得られた。

次の段階として、貝塚の体積を貝殻の重量に変換する必要がある。貝塚には貝殻以外の遺物や土砂なども多く含まれるからである。詳細に踏み込む余裕はないが、ここでも著者は複数の方法を実施し比較検討する。いずれの方法でもサンプルを多く採取し、そこで得られた比率をどのように全体に還元するかが比較されている。この結果、貝殻の重量は200.18tであることが分かった。続いて、これを貝種ごとの体積に分ける。これもサンプルの分析から得られた貝種の構成比率を全体に

かけることで得ることが出来る。

次に、食品成分表から各貝種の廃棄率を引用し、重量から栄養価や蛋白量を算出する。このような過程を経て、伊皿子貝塚の貝類からは3655kcalの熱量が得られることが分かった。

最後にこれを貝塚形成期間や形成人数で割ることにより、一人当たりのエネルギーや蛋白量に変換する。集落人口が30人程度で、25年ほどの期間で貝塚が形成された場合、これらの貝によりまかなうことができるのは、1日に必要なカロリーの約13～18%、蛋白量では50%という数値が得られ、「カロリーはともかくとして、蛋白質の供給源としてはかなり重要」という結論に至った。

ただこの中で私は、上記の精緻な貝塚分析に比べると人口や集落継続年数の復元方法はやや検討が浅いようにも思える。もちろんこれらの課題を解決するのは容易なことではないが、だからこそ著者の柔軟なアイデアでこれらの課題に立ち向かう様を見てみたかったとも思う。

いずれにしても、貝塚研究に限らず、著者の研究は明快であるものが多い。それはまず論理の組み立てがしっかりとしており、研究対象に対する問題意識とその解決のための方法論が明示されているからである。また方法論の提示に際しても、その方法論的弱点や限界についてもきちんと説明がなされており、著者が行なう議論を読者と共有するための配慮がなされるものが多い。内容についてももちろんだが、こういった点は今日でも見習うべき部分だろう。

私が本書の著者である鈴木公雄先生に初めてお会いしたのは、2004年5月に開かれた慶應義塾大学民族学考古学専攻設立25周年パーティでの席上であった。鈴木先生は名誉教授となられ、また体調も崩されていた中で、大学へいらっしゃる機会はほとんどなかった。当時私は学部2年生、専攻に入ってひと月の頃である。右も左も分からないまま、鈴木先生が研究者仲間とのお話の最中であつたところに割って入り、ご挨拶させていただいた。今から思えば甚だ不躰な学生であつたが、鈴木先生は優しくこちらの話に耳を傾けられ「若いうちは耳学問をしなさい」とおっしゃった後、また仲間との会話に戻られた(この時、鈴木先生が交歓していた方が赤澤威先生だったということは大分後になって知った)。鈴木先生はその年の10月22日にご逝去され、このパーティ席上での会話が私が鈴木先生と交わした最初で最後のそれとなった。「耳学問」は、鈴木先生がどのような意味を込めた言葉だったのかは分からないが、それ以来、私にとっての大事な言葉の一つとなった。

本誌が刊行される2016年10月は鈴木先生の13回忌にあたる月となる。改めて故人のご冥福をお祈りするとともに、鈴木先生の学恩に感謝したい。

## アルカ通信 No.157

発行日 2016年10月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : http://www.aruka.co.jp